

造幣局で、変わらぬ製法で作られる勲章

造幣局で作られているものといえば貨幣だが、お金では買えないものも作っている。それが、勲章だ。皇族の方々や総理大臣経験者などに授与される大勲位菊花大綬章、桐花大綬章。春と秋の叙勲のニュースなどで見かける旭日章や瑞宝章、文化勲章など、その種類は22。オリンピックメダルや国民栄誉賞の盾、褒章なども造幣局で作られている。

貨幣工場とは別棟の作業場を訪ねると、勲章のなかでも最高位の「大勲位菊花章頸飾」を作っている人がいた。現代の名工にも選ばれた、貴金属細工加工工・上田稔さんだ。大勲位菊花章頸飾は、現在、天皇陛下のみが着用されている。「大勲位菊花章頸飾は、貴金属細工の技のすべてを注ぎ込んだ、最も難しいとされる勲章です。明治時代以来、変わらない手作業で作っています」と上田さん。

勲章づくりは、大きく3工程に分かれる。①勲章の模様を彫った金型を使い、材料である22金や純銀に模様をプレスする。②さまざまな工具で、不要なふちを切り取るなどしてパーツの形を作る。③七宝を焼き付けて、赤、白、緑など色どりをほどこす。そして最後に、パーツを磨き、組み立てて仕上げる。これらの各作業は、工程ごとに専門の職人が担当し、ひとつの勲章を作り上げるのに、長いもので延べ1年かかる。ちなみに、造幣局には勲章づくりに携わる職人が約80名いるが、七宝なら七宝、プレスならプレスと、入局から定年までその道ひと筋に技を極めていく。彼らは、造幣局職員でありながらまさに職人なのだ。

上田さんが担当するのは、②の勲章の形を作る作業と最後の仕上げ。まず上田さんは、0.2ミリの糸のこで、大勲位菊花章頸飾（以下、頸飾）の繊細な装飾を残すよう、プレスされたパーツを慎重に切り取っています。



造幣局・貴金属細工加工工

上田 稔さん



造幣局 装金課所属。1級貴金属装身具製法技能士。昭和31年生まれ。昭和50年、造幣局入局。人間国宝の中川衛氏に彫金・象嵌を学ぶ。平成21年「なにわの名工 受賞。平成25年「現代の名工」受賞。日本伝統工芸展で6年連続入選。日本工芸会 正会員。



繊細な貴金属の装飾と、赤、白、緑などの七宝が美しい勲章。写真右が、大勲位菊花章頸飾。写真左上が旭日大綬章、上左が瑞宝大綬章。勲章はすべて内閣府賞勲局からの受注により造幣局で作られている。



糸のこで模様を切り取った後、切り取った箇所すべてにヤスリをかける。形を崩さないようヤスリをかけるのではない。糸の子で切りきれなかった、細かな装飾の模様をより美しく“形作る”のが、ヤスリがけという仕事だ。

く。材料が柔らかい22金だけに、扱いは特に難しい。単純に切り抜いているように見えて、表面は繊細な細工が美しく見えるように細く、裏面は柔らかな金に強度を持たせるためにやや太く、断面が「ハ」の字の台形になるよう、切り取っていく。

次に、糸のこでは切りきれないさらに細部を、極細のかぎ針ほどの細いヤスリで形を整える。上田さんの手元には、手作りだという50本以上のヤスリがあるが、「箇所に合わせて、ほぼすべて使います」。ヤスリをかけると細かなヤスリの目が残るため、キサゲという細い刃物で表面を薄く削り取る。金の皮を薄くひと皮むくようなイメージだ。

さらにそのあと、工具をへうに持ち替え、ぎゅっきゅつと表面をこすっていく。すると、勲章が金色にキラキラと光りだした。艶が出たでしょう。この作業は磨いて光沢を出すだけでなく、へうで押さえることで金属の密度をぎゅつと高めて硬くしているんです。柔らかい22金の頸飾にとっては、とても重要な作業です」

「頸飾の裏面は桐炭で低いから、へうで磨きます。本当に昔ながらの作業です。こうした伝統的な手法が残っているのは、造幣局ならではではないでしょうか」「これらの製法は、マニュアル的な書物があるわけではなく、明治時代から造幣局で先輩から後輩へ、技能伝承されてきたものです」

美しさと風格をたたえる勲章を生み出す

勲章づくりは、かように繊細で緻密で、失敗が許されない細かい作業だ。「私はもともと細かい性格でね（笑）。細かいところにキズがないだろうかとか、ループであら探しをするように勲章をかつては見ていたんですよ。そんな上田さんの概念を変えたのが、平成15年、東京藝術大学での委託研修だった。作品にこれでもかと近寄って見ていた上田さんに、担当教授（現・学長）の宮田亮平先生が言った。「そんな風に見なくてよい」「全体をぱつと見て、よい！というものがいいんだよ」と。

「先生は作品を見るときに、まず、よいところを見られます。あら探しをしない」「その感覚がそれまでの私にはなかった。物の見かたがまったく変わりました」。勲章にキズはあつてはならないので、そのまま当てはまるわけではないが、細かいことばかりに気をとられることがなくなった。そこから、「作るものが変わったといわれるようになりました」。上田さんの作る勲章に、どんなとした存在感、風格や美しさが増したと評されるようになったのだ。「どんなとした美しさ」というのは、勲章を授与された方にも伝わるのではないかと思っています」

「勲章は、すばらしい功績を上げた方に授与されるもの。ひとつひとつ気持ちを入れて作っていますが、考えれば考えるほど責任重大な仕事です」

上田さんの左手には、いくつもの小さな黒いアザがある。若き日に誤ってヤスリで刺した痕だという。「つけようと思つてつけたアザじゃないですよ（笑）。若いころから毎日、イヤというほど糸のこやヤスリをやりました。でも、そのおかげで今がある」

現在は、造幣局の勲章づくりも機械化が進行中で、手作業が減りつつある。若い職人は糸のこやヤスリを使う機会も少なくなっている。「技の習得には数をこなすことも必要ですから、いかに技能を伝承していくかが、今いちばんの課題です」

父親も造幣局勤務の経験がある、貴金属細工加工の職人だった。小さいころから糸のこが遊び道具で、勲章が作りたいと入局して40年。「あと2年で定年です。好きなことを続けてこられて、私はしあわせですね」



ゴリゴリゴリ……。装飾を浮かび上がらせていく糸のこの音だけが、上田さんの手元で小さく響いている。大勲位菊花章頸飾の首飾り部は、「明治」の「明」と「治」の古篆字と唐草がデザインされた3種類、計24個のパーツからなり、ひとつひとつ手作業でロウ付けしていく。大勲位菊花章頸飾は、海外の国王などからいただいた勲章に対する、儀礼叙勲としても授与される。